

佐伯と 國水 田 独 歩 (七)

— 若宮 八幡宮 —

会 員 山 本 保

佐伯市日禰、若宮八幡宮境内に「大分県重要文化財史跡、白湯遺跡入口」と書かれた大きな標識塔があり、また、次のような説明板も立てられています。

一、本社は、建久六年(一八五五年)緒方三郎惟宗(トヨムネ)山頂に八幡祠を創建す。

後、慶長九年(一六〇四年)毛利藩祖高政公築城に当たり現地に移した。

二、享保十三年(一七二八年)六代藩主毛利高慶公御幸を始め、爾来お城下船頭町、内町、山手を巡幸し、藩内の祠官悉く奉仕し、藩民百業を休及参拜す。

明治十三年に到り、鶴岡地区御巡幸。現在十月八日、九日、十日の神幸祭日、享保の行利帳によつて行なつてゐる。昭和四十四年が御巡幸第二四一回に当たつた。

一、社地内には大分県文化財指定「史跡 白湯遺跡」があり、弥生式中期堅穴住居跡並びに土師高床住居跡、貝塚、平安鎌倉時代の蔵骨壺が発掘され、保存されている。

二、明治の文豪國水田独歩の、養賢寺(中谷)八幡宮に参ると、その散歩の一巡路であった。其の

若、春の馬に「或る時は八幡宮の石段を数え上り……」とある。

告

樹木を伐ることを禁ず。

鳥類をとることを禁ず。

清浄を及ぼすことを禁ず。

左 淨地 靈地 聖地の保護保存

右

若宮八幡宮 宮司 緒方 壽生 謹書

(註) ① 源頼朝の時代

② 現在の城山八幡宮を勧請したつてものは八幡山と呼ばれていた。

③ 徳川家康の頃、鶴岡城築城の完成は慶長十一年。

④ 徳川吉宗の頃。

右の説明板と関連がある「春の馬」の一部を左に掲げます。(田かなづかいによる)

私(は独歩)も苦心に苦心を積み、根気よく努めて居ました。(注、白痴の戯と指導する左に)

或時は八幡宮の石段を数へて昇り、一、二、三と進んで七と止り、七たよと完ひ聞して、さて今の石段は幾個たとききますと、大きな声で十と答へる始末です。

秋の並木を数へても、葉子や飛葉に其数を数へても、結果は同じことです。一、二、三といふ言葉と、その言葉がいかにいかに、

白痴の数々を視念に欠けてゐることを聞いてはいました。だが、これほどまでとは思ひもよはず、私もある時は泣きたいほどに思ひ、子供(注、六歳)の顔を見つめたまま涙が自然に落ちたこともありました。

「春の馬」は独歩が愛した城山を背景にして、大蔵と
白痴少年と主人公とする哀れな物語ですが、作者の
愛情が少手にそそがれています。

日湯八幡宮と関連のある独歩の日記と紹介いたします。

「賤かざるの記」より

明治二十六年十月十七日（坂の南巡り）

今日廻らずも新嘗祭の休日なりしを以て、午後收

二（出前）と共に、城山の後より下村（江鶴岡村）の山
谷を歩り、小坂を越えて坂の南と称する海浜に出づ。

其の山麓、海に尽くる死の断崖の下をゆき、埠頭
（江鶴岡）をめぐり出でて帰宅へは、坂本邸へす。

路に草刈る乙女の群れと見、畦を行く夫妻の農夫
と見、谷間に集る小村と見、溪流と見、鳥獣と見、

碧海と見、白帆と見、漁火と見、舟と見、長へに送
る夕陽と見たり。

（注）①宮中行事。天皇が新米と天世の神に俵え、まを親し
くこれと食する祭事

②横上野村と上村、鶴岡村と下村と併せていよいよ。

同 十二月二十日

直ちに收二と共に散歩に決かけぬ。例の如く城山
をめぐらんと志して行きぬ。例の八幡の社へ自派八幡
宮へに米りて見れば、笛と太鼓の音、森にさかえて、

二流の旗、鳥居の外へ表松の傍に立つを見たり。

此の時、雨ふり居たり。例の谷へすの谷へを越ゆ。

雨にしみりし空気が、山谷の翠気と合ひ、例なる夕香
傍のしげみより起りて面を払ふ。

雲忽ち破れて光、箭の如く流れ下りて、林、谷、
春にみち、雨に濕みし葎葉簾かにきらきらとかがや

く、かか多時此坂越ゆる人、都へ来るの断り雨
に追はれて是る人にくんべて幾倍なる哉。
坂を越ゆれば、例の谷間に出づ。忽ち山の右左
に音す。鶴の叫、水鳥なりと。首をすまして聞
けり、伐木丁、山更に幽かなり。

鶴宮存輝生後富永徳磨の日記は左の通り。

明治二十七年一月二十一日

午後より岡本田兄弟、葉師寺（音造、キキと致公監修）
尾崎（明）以下鶴宮存輝生後、飯沼（源三）、山口（有一）、
武石（素志）と相伴つて郊外散歩に出づ。

森として並ぶ立の古杉の間に蔵あり、川がしく
溝へられたる葎宮八幡宮の前を過ぎ、白濁を運ぶて
常態の色は見えつつは、尚短へる風情なる一本杉の
峰に出で、坂の浦に下りぬ。

鶴岡の野はいつも女がら愉快なりき。また谷をら
ねど、蕨がすむ横瀬として野山にたなびき後れり小
林の下に二の三の居並ぶ藤原村（藤原区）にたなびき
山を切回めて造りたらん如き山懐なる高畑（高畑区）
を知り、毎度女れとまた一層の快味なりき。

坂の浦より湯に廻り、帰路にへきぬ。雨入浦（雨の
浦区）民家の籬内へは、山也竹をよむ編む石壁に咲き初め
てしと云はんは、梅の花、また香を散らす時り
立ち、手折らん人を待顔なるいとゆかしかり。

さすがに風流、奇人岡本田師見通し得で一枚手
折り持帰りぬ。

同

三月三十日（以下独歩の日記）
郵便を出しに行きしついでに收二を伴うて散歩す

試み、城山の後をめぐり、例の八幡社の幽境を探り、例の中ノ谷の静肅を呼吸し、例の招魂場(四所)陸軍墓地ノ谷間に出でて、遂に招魂場に至り桜花を賞す。

同 四月十三日

薄暮出でて散歩す。連日の雨ばかりで暗れて、新月(注)東空に輝き出しを月ノ光心としおもしろか。星の光も殊に美しきと感ぜぬ。中ノ谷より城山の後ろに出で、若宮八幡社内を過ぎて、杉ノ月を賞す。

同 四月十八日

昨夕も今宵も、月光と踏ん、星彩を仰ぎて城山の麓を回りぬ。

山谷の月光、溪流の幽声、老杉の壯嚴、露と帯び光を受けて微風にきらめく笹、古なる神社の窓窓、幽邃、言ひ難き草木の香、心地よき微風微浪の氣候、杉など黒々と茂れう枝の寸きまよりもれる落る光の、その寸き、凡て美ならぬはあらず。

同 五月十三日

昨夜、夜やも更けて秋の中ノ谷を散歩す。

同 五月十九日

今また寂寥の谷(注)中ノ谷)を歩いて帰りぬ。(午後十一時十分) 明月に会す。昔が夜の最も美なる時なり。

同 六月八日

昨日は細雨(注)霧、今朝は日光(注)輝々、山野に光輝々、蒼空に清流々々。中ノ谷を散歩せり。秋の草

花露にうるおい、頭上の緑のかげ冷やか、人間の位、我家はここなり。心開きて見よ。

城山の山麓巡りは、独歩が最も好んだ散歩道でした。山麓をめぐるので、城山の東側養賢寺裏から養賢寺の傍と過ぎ、山ノ後(中ノ谷)と越して西側(日産)に出るのと、それと反対は、西谷、杉谷の方を廻って、白厚八幡社と過ぎ、中ノ谷と越して東側養賢寺裏に出る二つのコースがありました。独歩は後者のコースを散歩することが多かったようです。

また、白濁部落を通過して、坂一へ越した向いの坂ノ浦と呼ぶ海岸に出たこともありました。時には、養賢寺水側ノ道から、その奥にある招魂場を訪ねたりしています。この山裾ノ道と、雨に濡れて歩いたり、月ノ夜に歩いたり、真夜中に左に独り歩いていたりしています。

若宮八幡社地内は、次のような説明板が立てられています。(一三三)

白濁遺跡案内標(其二)

- 一 所在地 佐伯市大字鶴望 白濁八幡宮社址
- 二 名称 大分県指定文化財 史跡「白濁遺跡」
- 三 第一、第二貝塚
- 四 遺物 ①弥生式中期まで穴住居跡

- ①土師 高成住居跡
- ①平安朝、奈良朝蔵骨器
- ①遺物、弥生式前・中・後期各種土器片

一、本遺物の特徴

発掘学術調査結果、本遺跡及び三層の地層から成り、最下層層に弥生式住居跡、中下層に土師高床跡、最上層に葦骨器、土師、須恵の土器片を発掘した。
即ち上層地帯、土師、須恵器より弥生式時代より中間、約千年の遺跡が本遺跡の一ヶ所に於て発掘され、発掘現況を保存してあることである。

遺物は社務所に保存してあるので、自由発掘が出来ません。説明は社務所に申出下さい。

佐伯商工観光課

(注)。六世紀頃の食糧と盛る容器として須恵器を使用しました。

用途によつて盤、壺、甕、甕、甕の種類の分化がなされていきました。
。日本各地の貝塚の中から貝殻が出土して、発掘された土器、石器、骨角器、鳥獣魚骨などが発掘されています。

弥生式中期堅穴住居跡（其二）

当時のまゝこわされることなく発掘された。現況がその当時のまゝの、楕円形にして南北七米二五、東西五米一五。

平地より約三〇程掘り下げ（堅穴）、四本の柱から葺き下し、中央に炉跡（カマド跡）を残している。

佐伯商工観光課

(注)。弥生初期には、住居と炉とは別々でしたが、中期になると、

炉と室内に使って使う工夫を考へ出すようになり、食物の煮炊きに炉を使っていたよう。

。惣括の家を建てると、堅穴から水がわたり、下から湿気が上がり、土の、又大雨が長雨かさいは水が溜れこむ危険があるので、小高い所に堅穴式の家をつくつたのでしよう。

。弥生期小倉、山王神社馬鹿横には小倉横穴古墳群、弥生期佐伯委員会、古墳群総数三十三ヶ所と書いた標柱や、古穴古墳群第一号とある標識板が、昭和十七年四月、文字通り目にとまります。

。佐伯市以月（下駄目）で長良貝塚、佐伯市長倉（上駄目）で下城遺跡が発掘されています。

土師高床住居跡（其三）

現表土から約一〇掘り下げ右地層に、現況の如き柱の配列を見る住居跡が発掘された。

発掘された柱の配列から、高床の住居で平安朝時代の豪族の家で、寝殿造り風の或る程度の立派なものであったことが推測される。

佐伯市商工観光課

(注)

。平安朝時代の中央豪族の住居は寝殿造りという形式であり、寝殿とは正殿の意味で、寝所はほとんど無階級で、中厨の名称を借りたものです。

。寝殿は主人の住居で、公式な乗客に会合する場合には使われていました。

。この寝殿は東西南北に同じようなつくりの柱の屋があり、ここに家族などが住んでいました。

。正妻は北の対に住むが、ふつとで、夫人と「北の方」というのもその左様です。

。佐伯の豪族が、或る程度の寝殿造り風の家に住んでいたというこは興味深いことです。

次のような茶殿敷もありす。

- 一 遺物展示所(茶殿右側室(白濁遺物保存館))
- 二 遺跡入口は、上の鳥居前、木の橋を渡る。
- 三 鍬は社務所におりす。

貝塚、竪穴住居跡、高床住居跡の周囲にはつつしの植込みがあつて、花の最盛期にはすばらしい景観です。近くには佐伯土木事務所管理の花畑があつて、四季の花が咲き乱れてゐます。

同時に、若宮八幡宮の社叢は、貴重な文化財(天然記念物)の一つといえますよう。

若宮八幡宮の祭神は、仲愛天皇、神功皇后、応神天皇、比売大神の四柱です。

仲愛天皇
 比売大神
 神功皇后
 応神天皇
 仁徳天皇

茶殿年表

年号	元	文治	建久	慶長
元	一一八五	六一九五	九一七八	一六〇〇
事	源頼朝、鎌倉幕府創立	諸方惟栄山頂に八幡社建立	大友敏直(初代)守叢蔵として豊後入国	関ヶ原合戦
事				毛利高政目田より佐伯へ移封する
事				高政八幡社を日野に移し鶴屋城を築く

元和	元	一六一五	大友夏ノ陣(前年に冬の陣あり)
〃	三	一六一七	度神社を自海に勧請
享保	一三	一七二八	若宮八幡社殿造営、遷宮の祭典を行ふ。毛利高政(六代)御神事を始むる。
宝暦	三	一七五三	住吉神社、稻荷社、志比須社、秋葉を自海に勧請
文化	二	一八〇五	内所、船頭所正瓦座敷の家屋ができてはじめる。
明治	一三	一八八〇	若宮八幡、鶴岡地区御巡幸
〃	二六	一八九三	剛水田独歩鶴谷浮解鼓舞として承り、鶴岡地区散策。
〃	二七	一八九四	「救かざるの記」起筆
〃	三七	一九〇四	独歩、佐伯を去る。
昭和	三三	一九五八	独歩「春の鳥」と発表
〃	四四	一九六九	白浮遺跡、大分県文化財史跡に指定する。(昭和三三年下成遺跡発掘。全三三年白浮遺跡発掘)
〃	四四	一九六九	若宮八幡御巡幸。二四一回目に当る。

(江) 若宮八幡宮境内の摂社

- 一 稲荷社(祭神宇迦之御魂神) 宝暦三年京都伏見稻荷寺に勧請す。
- 二 志比須社(末代主命又は大國主命) 石清水八幡宮の摂社を宝暦三年に勧請す。由連、漁業の神、守護神。
- 三 秋葉社(大山祇大神) 俗に「山」の神祇。宝暦三年勧請
- 四 度神社(猿田為大神) 元和三年勧請。素戔嗚尊神。
- 五 交通安全守護神(守世に及も、藩府如來を祀る) (後)